

Othelloにおける否定構造

松浦 美佐子

1. 否定語の分布とその意義

Othello における否定語の分布には一定の特徴が見られる。すなわち、不安が高じた場面において否定語の使用頻度が増加するというものである。ここでいう否定語とは、*no, not, never, nay, neither, nor, cannot, nought/naught, none, nothing* の他、否定の接辞 *un-, in-, im-, dis-, non-, mis-, -less* を取る語、接続詞 *unless*、前置詞 *without, sans* を含む。これら否定語の出現頻度を、場面または台詞ごとの総語数に対する比率で見ると、心理的な不安が高じた場面および状況が不透明である場面において否定語の出現頻度が上昇し、不安の消滅とともに否定語が減少または消滅する傾向が見て取れる。

表 1 には、特に否定語の頻度の増減が顕著な場面および台詞を挙げた。まず、状況の不透明さとの関連を見ると、1 幕 3 場の冒頭、戦況が不透明な場面での否定語の頻度は高い。しかし、使者の入場でトルコ軍の動向が明らかになった途端、否定語の使用は減少する。同様に、2 幕 1 場の冒頭、キプロス島にて嵐の中、味方の船の安否を案ずる場面での否定語の使用頻度は高い

表 1. 否定語の頻度と語数に対する比率

幕. 場. 行	頻度	語数	比率	場面
1.3.1-31	13	247	0.053	トルコ軍の動向不明
1.3.32-47	1	104	0.010	使者の入場
1.3.127-69	2	344	0.006	Othello 求婚について語る
1.3.244-55	0	100	0.000	Desdemona 同行を願う
1.3.256-70	4	109	0.037	Othello 同意する
2.1.1-19	6	145	0.041	嵐の中、キプロス島
2.1.20-42	1	177	0.006	ヴェニスからの船入港
2.3.145-230*	2	291	0.007	Othello 喧嘩騒ぎを収拾
2.3.160-68, 201-27	8	283	0.028	Iago 事態を説明する
3.3.195-240	21	338	0.054	Iago の罫
3.3.339-44	7	59	0.119	Othello の錯乱
5.2.334-52	7	150	0.047	Othello 最後のスピーチ
5.2.357-67	0	82	0.000	Lodovico 秩序回復

*その場面での Othello の台詞のみ

が、船の入港で味方の安否が確認された途端に、否定語は消滅する。

否定語の頻度の増減には、状況だけでなく心理的要因も大きく関わる。不安のない場面、例えば、1幕3場127行以下、Othelloがヴェニスの貴族たちを前に、自信に満ちDesdemonaへの求愛の過程を語る台詞に、否定語はほとんど使用されない。あっても、Desdemonaの言葉の伝聞、およびDesdemonaを描写した部分のみである。同様に、2幕3場145行以下、Othelloがキプロスの統治者として喧嘩騒ぎを收拾する台詞の否定語の頻度は低い。この傾向は他の劇中人物の場合でも同様で、例えば、5幕2場、秩序回復を担うLodovicoの最後の台詞に否定語はない。また、1幕3場244行以下、Desdemonaが、Othelloの妻として軍務への同行を願う台詞にも否定語はない。しかし、それに続く256行以下のOthelloの台詞では否定語が多用され、Desdemonaの申し出に対するOthelloの心理的動揺が見て取れる。とりわけ、否定語の出現頻度と心理的要因の関連性が最も顕著であるのは、3幕3場、IagoがOthelloを罠にかける場面である。特に、妻の不義を信じたOthelloが錯乱する以下の台詞では、59語の短い台詞に7例もの *not* が集中し、その心理的不安・錯乱の甚だしさが示される。

What sense had I of her stolen hours of lust?

I saw't not, thought it not, it harmed not me.

I slept the next night well, fed well, was free and merry;

I found not Cassio's kisses on her lips.

He that is robbed, not wanting what is stolen,

Let him not know't and he's not robbed at all. (3.3.339-44 : 以下、下線は筆者)

高原脩 他 (193-94)¹ は、社会活動や人間関係の中での言語の力、特に、言語が人を位置づけ形作る力、現実の維持や再構築の力について論じた。Shakespeareの否定語の使用にも、このような現実の維持・再構築、社会や人間関係の中で登場人物を位置づけ形成する力が働いていることは言うまでもない。例えば、Stanley Husseyは、*King Lear*における前半の接頭辞 *un-* の多用と、3幕4場を境にした減少を、以下のように意味づける。

Clearly these unusual epithets are a reflection of Lear's distortion of reality. Later uses of *un-* are both fewer in number and their novelty now represents his increasing perception. (60)

すなわち、接頭辞 *un-* の減少とともに、Learの現実認識能力が増すという解釈である。この他、Helen Vendlerの*The Sonnets*の分析には、否定構造の使用について幾つかの文体的解釈が示されている。例えば、Sonnet 66では、*unhappily*、*misplaced*、*disgraced*、*disabled*、*miscalled*等、否定の接辞を取る語が集中して使用されるが、それによって社会秩序の崩壊が

示唆されるというものである (309)。

本稿では、これらの先行研究を踏まえながら、*Othello* における否定構造の力、特に、その文体的機能について考察を進めていく。

2. 否定構造とその現実再構築機能

Othello では、その登場人物が現実認識の再構築を求められる場面が、繰り返し描かれる。不安要因と否定語の使用頻度の関係から、否定構造は劇中人物が不安に対処する際に何らかの機能を果たしていると考えられる。例えば、人は不安に直面したとき、不安の原因となる現実を自己に都合よく再構築しようと試みる。不安な場面で多用される否定構造には、現実認識を改める機能があるのではないだろうか。以下では、否定構造が認識再構築にどのように寄与するのか、特徴的な構造を取り上げ検証していく。

2. 1 現実再構築の過程における否定構造

まず、現実認識の再構築を求められるのは Desdemona の父 Brabantio である。娘の Othello との駆け落ちを知らされた Brabantio は、夢か現かという事態に対して “This accident is not unlike my dream.” (1.1.141) と、非現実性が高い “dream” という語彙とともに、“like” という肯定的表現ではなく “not unlike” という二重否定²を用いる。これらの語彙と構造の選択には、目の前の現実に対応しかねる Brabantio の混乱が描き出される。

さらに、Brabantio は、自分の信じる Desdemona の姿に矛盾しないよう、娘の駆け落ちした理由を Othello に魔法で誑かされたからだと考える。この過程において、彼は他者からの承認を得ることで、その認識強化に努めるが、その手法が一連の否定疑問文の使用である。

[BRABANTIO] Is there not charms
By which the property of youth and maidhood
May be abused? Have you not read, Roderigo,
Of some such thing?
RODERIGO Yes, sir, I have indeed. (1.1.170-73)

ここで Brabantio が承認を求めた相手とは Roderigo である。娘にはふさわしくないと拒絶した元求婚者を頼りにするとは、喜劇的ですからあるが、それだけに一層、父親の切迫した感情が描き出されていると言えよう。1幕2場へ進むと、彼の認識は、Othello への直接の非難を通じて、さらに強化される。以下の否定の条件節とは、Othello への攻撃であると同時に、Brabantio による自己説得の過程でもある。

If she in chains of magic were not bound,

Whether a maid so tender, fair, and happy,
So opposite to marriage that she shunned
The wealthy curled darlings of our nation,
Would ever have, t'incur a general mock,
Run from her guardage to the sooty bosom
Of such a thing as thou – to fear, not to delight. (1.2.65-71)

続く1幕3場では、Othello への攻撃は、私的な場面から公的な場面へと移る。この段階では、魔法への言及は、ただ2語の“Sans witchcraft”に集約されている。既に魔法による誑かしは、Brabantio の認識では事実となり、1幕2場の台詞のような自己説得は不要となっている。

For nature so preposterously to err,
Being not deficient, blind, or lame of sense,
Sans witchcraft could not. (1.3.62-64)

これら一連の否定構造（二重否定、否定疑問文、否定の条件節など）は、Brabantio の信じる Desdemona 像を維持しながら、現実認識を再構築する過程の一部となっている。特に、否定疑問文は、他の登場人物の台詞においても、同様の機能を示しながら繰り返される。例えば、Montano と Lodovico³は、Iago から Othello の人物について認識を改めるよう促される役どころである。しかし、ともに己の抱く Othello 像を維持すべく、目の前の現実をそれに合わせて解釈しようとする。新たな現実認識への承認を Iago に求める際に、両者が使用するのが否定疑問文である。まず、Montano は、Cassio (Iago のいうところでは酒癖に問題のある) を副官とした Othello の判断を、彼の高潔さゆえと解釈し、Iago の承認を求める。

Perhaps he sees it not, or his good nature
Prizes the virtue that appears in Cassio
And looks not on his evils: is not this true? (2.3.116-18)

4幕1場、Lodovico と Iago の間に同様の場面が繰り返される。妻を殴る Othello の姿は Lodovico の知る Othello 像とは相容れない。そこで、彼はそれを狂気ゆえと意味づけようとする。

LODOVICO Are his wits safe? Is he not light of brain?
IAGO He's that he is; I may not breathe my censure
What he might be. If what he might he is not,
I would to heaven he were. (4.1.260-63)

ここでも否定疑問文が承認を求める言語手法の一部となっている。しかし、Iago に否定され、Lodovico の現実再構築は頓挫する。

2. 2 Roderigo との対比における Othello の否定構造

Roderigo と Othello の現実認識も、Iago によって歪曲されていく。その過程において Iago は否定構造を効果的に用いる。まず、Roderigo に対しては、Brabantio が自己説得に用いるのと同じ否定構造（否定の条件節、二重否定、否定疑問文）を用いて働きかける。まず、劇の冒頭、Roderigo の非難に対して、Iago は否定の条件節で “Despise me if I do not” (1.1.8) と応じる。この応答の巧みさは、主節の “Despise me” で Roderigo の言い分を一旦認めながら、後半の条件節の否定 “if I do not” でそれを転覆させるところにある (Herman 229-32)。同様の手法は、二重否定の使用にも見られる。相手の言い分を “your suspicion is not without wit and judgement” (4.2.206-7) と一旦認めた後に、反論を開始する。また、連続する否定疑問文によって、Roderigo の Desdemona への認識に揺さぶりをかけていく。

If she had been blest she would never have loved the Moor. Blest pudding! Didst thou not see her paddle with the palm of his hand? Didst not mark that?

(2.1.238-41)

Norman Fairclough (46) は、力の優劣がある関係における、力を持つ者から持たない者への否定疑問文の使用は、相手を愚かに見せる効果があると論じたが、上の Iago から Roderigo への否定疑問文はまさにこの典型である。

一方、Othello に対しては、異なる否定構造が選択される。そもそも、否定疑問文、否定の条件節、二重否定は、Othello の台詞では異なる機能を果たしている。例えば、否定の条件節 “when I love thee not, / Chaos is come again” (3.3.91-92) や二重否定 “I will deny thee nothing” (3.3.76; 3.3.83) は、ともに Desdemona への愛の強い表明であって、自他の現実認識を変容させる機能はない。また、Desdemona に向けた否定疑問文 “Are not you a strumpet?” (4.2.81)、“What, not a whore?” (4.2.85)は、激しい怒りの発露であって、これもまた、他者の現実認識の変容を促したり、他者からの承認を求めたりするものではない。

Roderigo と Othello に対して Iago が否定構造を使い分けるのは、それぞれの否定構造の機能が異なるからだけではない。両者が否定する対象も異なっているためである。それが特に顕著に現れるのは、Iago が Desdemona の Cassio との不義を仄めかした時の両者の反応である。両者はともに否定で応えるが、それぞれが否定する対象は異なっている。まず、Roderigo は不義の可能性を “Why, 'tis not possible!” (2.1.211)、“I cannot believe that in her” (2.1.236) と直截に否定する。一方、Othello が否定するのは、妻の不義ではなく、己の猜疑心である： No, to

be once in doubt / Is once to be resolved. (3.3.181-82)。

2. 3 Othello の自己欺瞞と否定の機能

Othello はなぜ Desdemona の不義ではなく、自己の猜疑心を否定するのか。ここで重要なのが、両者の社会的位置付け⁵の違いである。生まれながらの貴族である Roderigo とは異なり、Othello はヴェニスから付与された高潔で勇敢な武人という記号としてのみ存在するにすぎない。この社会的位置付けの不安定さは、Othello に確固たる自己概念、現実認識を希求させる要因⁶となる。そこが Iago の付け入る隙となり、Iago は、Othello が抱える不安、さらにその不安を認めようとしないうち自己欺瞞に乗じて、巧みに罠にかけていく。

IAGO I see this hath a little dashed your spirits.

OTHELLO Not a jot, not a jot.

IAGO I'faith, I fear it has.

I hope you will consider what is spoke
Comes from my love. But I do see you're moved.
I am to pray you not to strain my speech
To grosser issues nor to larger reach
Than to suspicion.

OTHELLO I will not.

....

[IAGO] My lord, I see you're moved.

OTHELLO No, not much moved.

I do not think but Desdemona's honest. (3.3.216-27)

この対話における Iago の巧みさとは、不安を認めようとしないうち Othello に乗じて、彼に偽りの否定を繰り返させることである。自らの抱える不安を否定するごとに、Othello の自己欺瞞は増大し、真実を虚偽と取り違える下地が強化されていく。その結果、以下の場面で、Othello は Emilia と Desdemona の否定に込められた明白な真実を信じる事が出来ない。まず、Othello が Emilia に Desdemona と Cassio との密会について問いたす場面を挙げる。

OTHELLO What! Did they never whisper?

EMILIA Never, my lord.

OTHELLO Nor send you out o'th'way?

EMILIA Never.

OTHELLO To fetch her fan, her gloves, her mask, nor nothing?

EMILIA Never, my lord.

OTHELLO That's strange.

(4.2.6-10)

Emilia の “Never” は一貫して真実である。にもかかわらず、Othello はその真実を受け入れることができない。同様のことが Desdemona の “No” に対しても繰り返される。

OTHELLO Are not you a strumpet?

DESDEMONA No, as I am a Christian.

If to preserve this vessel for my lord

From any other foul unlawful touch

Be not to be a strumpet, I am none.

OTHELLO What, not a whore?

DESDEMONA

No, as I shall be saved,

(4.2.81-85)

そもそも否定に偽りの含意を与えたのは Othello である。あるがままに不安を認めず、己には猜疑心などないと偽ったのは Othello である。その一方で、彼は、物事は見かけ通りでなければならぬと頑なに信じる。Iago のいう “Men should be what they seem” (3.3.127) の見かけと内実の一致は、強迫観念となって Othello の認知を硬直させていく。

2. 4 Desdemona への言及における否定構造

Othello の不安に乗じて、Iago は巧みに Othello の Desdemona 観を貶めていくが、その過程で用いられるのが否定の接辞である。Iago は、まずヴェニス的女性一般を “Their best conscience / Is not to leave't undone, but keep't unknown.” (3.3.205-6) と、続いて Desdemona の愛を “a will most rank / Foul disproportion, thoughts unnatural” (3.3.234-35) と貶める。⁷ 先に挙げた Vendler (309) は、否定の接辞の多用を社会秩序の崩壊と関連付けたが、ここで Iago が行ったのも Desdemona の愛の価値の転覆である。

Iago の影響下、3 幕 3 場以降、Othello の Desdemona への言及は、否定的なものへと一変する。しかし、Othello の使用する否定表現は Iago のものとは異なる。Iago が否定の接辞を多用したのとは異なり、“false” のように、意味それ自体が否定的な語彙を好んで用いる。

3 幕 3 場以降での Othello が Desdemona に言及した最初の否定的語は “false”⁸ である。しかし、これは Desdemona の姿を目にした途端、“If she be false, O then heaven mocks itself: / I'll not believe it.” (3.3.280-81) とすぐさま打ち消される。しかし、Desdemona の不義を信じるべきか否か、Othello の意識は不義と貞節の間で揺れる。一人になると “false to me!” (3.3.334) へ戻り、再び Iago に対して “I think my wife be honest, and think she is not” (3.3.385) と迷いを見せ、すぐさま “Give me a living reason she's disloyal” (3.3.410) と不義

の確証を求める。Desdemona の不義を疑う過程で、*not* による否定と否定の接辞が用いられたのは、上の 2 例に過ぎない。Desdemona の不義を事実と認識するに至って、Othello が選択するのは以下のような否定的意味の形容詞・名詞群となる。

[Her name] is now begrimed and black / As mine own face (3.3.388-89) / lewd minx (3.3.476) / This is a subtle whore, (4.2.20) / thou art false as hell (4.2.38) / there look grim as hell (4.2.63) / Impudent strumpet! (4.2.80) / that cunning whore (4.2.88) / she was foul! (5.2.199)

特に、5 幕 2 場の Desdemona 殺害直前には、Othello は Desdemona を “strumpet” (5.2.78; 5.2.80) と呼んではばからない。なぜ Othello はこのような直接的な語彙を選択するのか。ここに読み取れるのは、Othello の曖昧さに耐えられない性向、妻が “honest” なのか “not [honest]” なのかと逡巡することに耐えられず、どのような結論であっても性急に飛び付かずにはいられない Othello の性向である。

2. 5 Othello の自己認識と否定構造

曖昧さと不安の回避が優先されるとき、妻がどのような人間であるかは Othello にとって問題ではない。しかし、自分がどのような人間であるかという問題については、同様の性急な結論を下すことはできない。そもそも、勇敢で高潔な武人としての自己認識は、ヴェニスから付与された記号に過ぎない。この他者から与えられた自己像に安住しているかぎり、Othello は自分が実はどのような人間なのか知ることはできない。彼の自己像は、妻の不義によって崩壊し、妻の殺害によって回復されるはずであった。しかし、彼女の無実はそれを許さない。Desdemona の無実が明らかになる過程で、Othello はどのような自己再構築を試みたのであろうか。また、その過程で否定構造はどのような機能を果たしているのであろうか。

まず、Desdemona 殺害直後の Othello に、Emilia は彼の愚かさや残忍さを極めて直接的な語彙で非難する。

the blacker devil (5.2.132) / a devil (5.2.134) / rash as fire (5.2.135) / gull (5.2.162) / dolt (5.2.162) / ignorant as dirt (5.2.163) / dull Moor (5.2.223) / murderous coxcomb (5.2.231)

愚かで残忍という受け入れがたい自己像を前に、Othello の自己認識は揺らぎ始める。まず、彼は武人としての自己を二重否定⁹によって否定し、名誉の虚しさを嘆く。

I am not valiant neither,
But every puny whipster gets my sword.

But why should honour outlive honesty?

Let it go all.

(5.2.241-44)

しかし、Lodovico の問いかけに、再び名誉への執着を見せる。

An honourable murderer, if you will;

For naught did I in hate, but all in honour. (5.2.291-92)

無実の妻を殺害した彼に、どんな名誉があるというのか。その後、Cassio からハンカチ入手の経緯を聞いた Othello は、“O fool, fool, fool!” (5.2.319) と自己の愚かさを嘆く。しかし、これが Othello の自己認識の最終地点とはならない。彼の最後の台詞は、ヴェニスの人々を前に語られる。

Soft you; a word or two before you go.

I have done the state some service and they know't:

No more of that. I pray you, in your letters

When you shall these unlucky deeds relate,

Speak of me as I am; nothing extenuate,

Nor set down aught in malice. Then must you speak

Of one that loved not wisely, but too well;

Of one not easily jealous but, being wrought,

Perplexed in the extreme; of one whose hand,

Like the base Indian, threw a pearl away

Richer than all his tribe; of one whose subdued eyes,

Albeit unused to the melting mood,

Drops tears as fast as the Arabian trees

Their medicinable gum.

(5.2.334-47)

ここに Marjorie Garber (615) は、私的な罪と公的美徳によって記憶されるべき Othello 像の提示を見る。また、Derek Cohen (94) は自己憐憫、愚かさと苦痛の認識、作られた自己と真の自己への怒り、憎悪などを読み取る。否定語に目を向けると、その頻度の高さから、この場面における Othello の心理的動揺のはなはだしさが見て取れる (表 1)。

さて、ここに選択された否定構造は *not* と *un-* であるが、否定する対象の否定的評価の程度によって構造が決定されるようである。具体的には、否定的評価が自明である対象、例えば Desdemona 殺害には、“unlucky” のように接頭辞 *un-* が選択される。一方、Othello の愚か

さや猜疑心といった Othello 自身の評価が定まらない事象については “not wisely” や “not easily jealous” のように、not の否定構造が選択される。

Desdemona を殺害した Othello の愚かさは自明のことである。それを表現するには、“not wisely” ではなく、否定的意味が明白な “unwisely” がより適切な選択肢となったはずである。しかし、Othello という作品に “unwisely” は一例も出現しない。これは “unwisely” という否定語の意図的な回避¹⁰であると考えられる。というのも、“unwisely” と “not wisely” の意味するところは同一ではない。“Not wisely” から、“wisely” の反意語 “unwisely” は推意されるが、“not wisely” には “unwisely” に相当しない中間帯が存在する（レヴィンソン 164-65）。その意味で、Othello の “not wisely” の選択とは、“unwisely” から少しでも離れた位置に自己を再定義しようとするあがきである。同様に、Othello は己の猜疑心を “not easily jealous” と限定付きの否定で表現する。謀られなければ嫉妬に駆られることはなかったとは、猜疑心は Othello の常ではないという主張となる（Kermode 181-82）。

この Othello の自己再定義における迷いは、Lear との比較でより鮮明になる。*King Lear* の 4 幕 6 場、Cordelia との再会の場面で、Lear は自らを “I am a very foolish, fond old man” (4.6.57) と明確に再定義する。ここに Lear の自身認識と自己評価は統合され、Lear の最後の台詞 “Never, never, never, never, never.” (5.3.282) へと集約される。「日常の統語法を欠き、詩の韻律もまた無視されている」（梅田 181）この全てをそぎ落とした否定構造に、言葉は何の役にたたない深い絶望が描かれる。Othello の最後の台詞にも、深い絶望が込められているはずであるのに、Othello は “unwisely” と “jealous” と断言することをしない。その否定構造の選択には、死の間際まで、自己の愚かさをどうしても認められない Othello の混迷が映し出されている。

3. 結語

Othello には、“Men should be what they seem” (3.3.127) という見かけと内実の一致への強迫観念が溢れている。見かけと内実の乖離に対処するには、乖離を引き起こす現実を都合よく解釈しなおすか、Iago の言う “I am not what I am” (1.1.66) にならって、乖離を認めるかである。Iago 以外は前者を選択し、様々な否定構造を用いて現実の再構築を試みる。

Othello も、自己像の見かけと内実の一致に固執した結果、自己欺瞞に陥り真実と虚偽の境を見失う。一方、他者に対しては、物事は見かけどおりと単純化した認知を試み、Desdemona の不貞を信じる愚を犯す。Iago の姦計が暴かれ Othello は拗って立つべき自己を喪失するが、それでも自己の愚かさを認められない。Othello の否定構造の選択には、これら Othello の性急さや混乱が反映されている。最終的に、Othello は自死によって自己の愚かさと折り合いをつけ、愚かな自己を認めると同時に、高潔な自己によってそれを殺害する。結局、Othello は自分の愚かさに向き合うことなく、それを消去するために高潔な自己をも消滅させる。死とは、所詮、自己とは何か知ることをやめることに過ぎない。

注

- 1 引用部分の執筆者は林礼子である。
- 2 初期近代英語における多重否定の原理は“the more negatives in the clause, the more emphatic the negative meaning” (Crystal 183; Brook 86) だが、ここでは肯定の意味である。
- 3 Lodovico と Brabantio は同じ役者によって演じられたという記録がある (King 91)。
- 4 Doran 80.
- 5 Hall 184-85.
- 6 Iago もまた Othello とこの不安を共有している (Magnusson 221)。
- 7 修辞学の negatio とは、話すことの拒絶である (Plett 426)。Plett は、Iago を negatio の実践例に挙げ、求められた情報を与えない、偽りの告白、女性の貞操概念について一般論から入るなどの特徴を指摘する (Plett 462-66)。
- 8 Othello 以上に “false” を使用するのは Emilia である。これは Emilia によって Iago の姦計が暴かれ、Desdemona の無実が明らかになる場面へ向けての漸層法的効果を持つ。

Thou art rash as fire to say / That she was false. (5.2.135-36) / That she was false to wedlock? (5.2.141) / My husband say that she was false? (5.2.151) / He says thou told'st him that his wife was false. (5.2.172) / But did you ever tell him she was false? (5.2.177) / She false with Cassio? (5.2.181)

- 9 家入 (215) は *not ... neither* について「多重否定そのものが稀になる近代英語期以降では、多重否定の一つの型として際立つ傾向がある」と述べる。
- 10 *The First Folio* 全体では、“unwise” は 3 例、“unwisely” は 2 例見られる。他に、*The First Folio* に見られるが、*Othello* にはない否定語として、“dishonor” とその派生語 (*dishonor*、*dishonorable*、*dishonor'd*、*dishonored*、*dishonor's*、*dishonors* など) が挙げられる。*Othello* においては、「名誉」も否定されるべき対象となり得ない。

引用文献

- Barber, Charles. *The English Language: A Historical Introduction*. Cambridge and New York : Cambridge University Press, 1993.
- Barton, Anne and John Kerrigan, eds. *Editions and Adaptations of Shakespeare: A Full-Text Database of Major Historical Editions and Theatre Adaptations of the Works of William Shakespeare*. Cambridge: Chadwyck-Healey Ltd., 1995.
- Blake, N. F. *A Grammar of Shakespeare's Language*, New York: Palgrave, 2002.

- Brook, G. L. *The Language of Shakespeare*. London: Andre Deutsch, 1976.
- Cohen, Derek. *Shakespearean Motives*. London: Macmillan Press, 1988.
- Crystal, David. *Think on my Words: Exploring Shakespeare's Language*. Cambridge and New York: Cambridge University Press, 2008.
- Doran, Madeleine. *Shakespeare's Dramatic Language*. Madison and London: The University of Wisconsin Press, 1976.
- Fairclough, Norman. *Language and Power*. London and New York: Longman, 1989.
- Garber, Marjorie. *Shakespeare After All*. New York: Anchor Books, 2004.
- Hall, Jonathan. *Anxious Pleasures: Shakespearean Comedy and the Nation-State*. London: Associated University Presses, 1995.
- Herman, Vimala. *Dramatic Discourse: Dialogue as Interaction in Plays*. London and New York: Routledge, 1995.
- Hussey, Stanley. *The Literary Language of Shakespeare*. London and New York: Longman, 1982.
- 家入葉子. 「初期近代英語における否定構文—Lampeter Corpus の調査から—」加藤泰彦 他, 編, 『否定と言語理論』 開拓社, 東京, 2010.
- Kermode, Frank. *Shakespeare's Language*. New York: Farrar Straus Girous, 2000.
- King, T. J. *CASTING Shakespeare's Plays: London Actors and their Roles, 1590-1642*. Cambridge and New York: Cambridge University Press, 1992.
- レヴィンソン, S. C. 『意味の推定—新グライス学派の語用論—』 研究社, 東京, 2007.
- Magnusson, Lynne. “Voice potential”: Language and Symbolic Capital in *Othello*,” in C. M. S. Alexander, ed., *Shakespeare and Language*. Cambridge and New York: Cambridge University Press, 2004.
- Plett, Heinrich F. *Rhetoric and Renaissance Culture*. Berlin and New York: Walter de Gruyter, 2004.
- Shakespeare, William. *Othello*, ed., Norman Sanders. Cambridge and New York: Cambridge University Press, 1984.
- Shakespeare, William. *The Tragedy of King Lear*, ed., Jay L. Halio. Cambridge and New York: Cambridge University Press, 1992.
- 高原脩, 林宅男, 林礼子. 『プラグマティックスの展開』 勁草書房, 東京, 2002.
- 梅田倍男. 『シェイクスピアのレトリック』 英宝社, 東京, 2005.
- Vendler, Helen. *The Art of Shakespeare's Sonnets*. Cambridge and London: The Belknap Press of Harvard University Press, 1997.